

強引に進められる北見バイパス道路

～自然生態系の保護は、地域の漁業と農業を育てる～

(かわさき まさる)

1952年、日高支庁門別町生。

2003年10月「北見の自然風土を考える」市民連絡会を設立。2005年4月より事務局長。

オホーツクから食と農・漁を結ぶ、有機生産物の宅配トマト CLUB 代表。

オホーツク地域自治研究所、理事。

川崎 克

身近な自然の中に多様な動植物
 自然生態系と自然河川が一体となった豊かな
 自然生態系

北見バイパス道路予定地(端野町)北見市川東・北光地区)には、大雪山からオホーツク海に抜ける常呂川が流れています。常呂川右岸の丘陵地は、自然林に被われた斜面と、自然河川である常呂川が一体となって、豊かな自然環境が極めて高い地域です。

北見市(〇六年三月合併前)の市街地には国道三九号が貫通しています。これは旭川と網走を結ぶ国道ですが、現状ではそれほど渋滞や混雑は見られないにもかかわらず、網走開発建設部により、市街地東側の自然が豊かな地域にバイパス道路が計画されました。形式的な住民説明会は行われましたが、多くの市民は知らぬままでした。

また環境アセスメントを検証してみると、多くの問題点のあることが判明しました。そこで私たちはルートの変更を含む抜本的な見直しを訴えましたが、行政は聞く耳をもたず、強引に着工してしまいました。この道路は一般国道のバイパスとはいいながら、実態は帯広から足寄をへて網走に至る高規格幹線道路(高速自動車道)の計画地一部で、その飛び地として、強引に先行着工するねらいが込められているようです。

北見バイパス道路予定地の自然環境と道路計画の問題点をご紹介します。

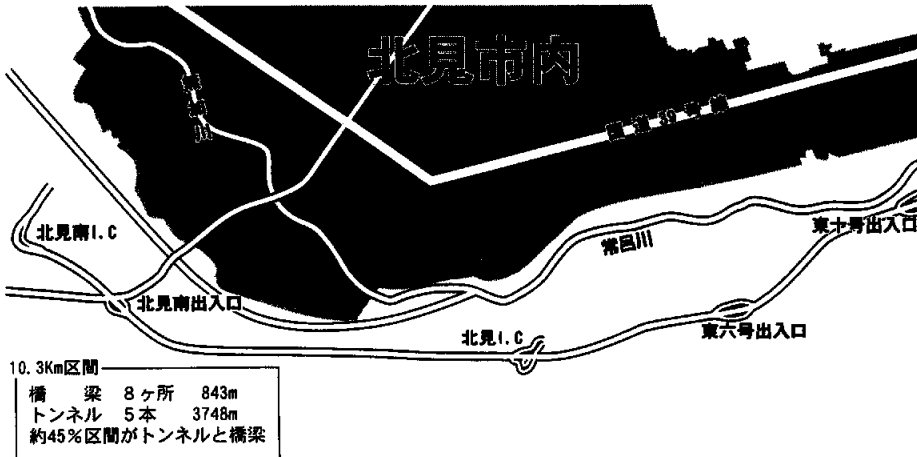


図1 北見バイパス予定ルート図

平成15年8月 網走開発建設部より

この川沿いのドロヤナギの木に、国の天然記念物のオジロワシが営巣をし生息しています。十一万都市北見市の中心部から三・五kmでの営巣は、

世界でも類を見ない極めて稀なことです。オジロワシの他にもオオワシ、オオタカ、ハイタカが確認されています。

また、大木の腐朽木とそこに棲むアリ類などを必要とするクマゲラ、自然河川の魚類を捕食するカワセミやヤマセミが生息しています。この他の動物で着目されるのは、チチブコウモリ、エゾモモンガ、カラフトアカネズミ、エゾクロテンです。他にも両生類三種、爬虫類二種（エゾサンショウウオ一種）、魚類十四種、昆虫類七三三三種（コエゾトンボ、エゾチツチゼミ、オオイチモンジなど）が確認されています。工事予定地は、豊富な水脈や地下の水分が、多様な自然を支えています。

沢筋から常呂川に清流が注ぎ、湧水には希少種に指定されているニホンザリガニが生息しています。植物相としては、約四四〇種の自生植物が生育しており、北海道東半部の低標高地では多様で極めて多い値です。自然性が豊かな知床山系でも、標高約二五〇m以下の森林地帯では二〇〇余種に過ぎません。環境影響評価書においても着目すべき植物として三十種があげられています。丘陵地のミズナラ林内で発見されたイワカゲワラビ、北見ヶ丘丘陵地ではホソバツルリンドウ、キタミフクジュソウなどの絶滅危惧種が確認されています。

二〇〇四年七月と九月に行われた北海道自然保護協会の佐藤謙会長らによる現地調査では、稀少植物としてオオエゾデング、ヒメハナワラビ、エゾヒメアマナ、クロミノウグイスカグラなどが、更に追加されました。国指定天然記念物シマフクロウも、二〇〇一年十月十九日に北見市小泉地区で確認されています。

また、胸高周囲五・五mの巨木ミズナラは、二〇〇三年十一月、樹木医の中内武五朗氏が、全道五指に入るのではないかと指摘しています。このような周囲三m以上のミズナラ等の巨樹、巨木が予定地内には多数存在しているのです。

さらにこの一帯には、旧石器時代後期から縄文時代中期にかけての遺跡が連続して存在するところであり、多様な面から貴重な地域と言うことができます。

自然生態系の保護は地域の漁業と農業を育てる

北見市は十一万都市でありながら、森林面積は二三、三二〇ha、市の約五五%が森林におおわれています。その中でもこの中の島エリア（北見ヶ丘（南丘）は、二〇〇四年七月と九月に行われた北海道自然保護協会の現地調査で明らかになったように、氷河期の生き残りと言われる高山植物や天然記念物のオジロワシなどが生息する、豊かな自然があふれている地域です。

一つの生態系において、食物連鎖の頂点に位置する肉食動物が多様に存在することは、この地域の自然生態系が極めて豊かであること、自然林に被われた斜面と自然河川が一体となったこの地域の特殊性を表しているといえます。

常呂川の豊富な魚類、とりわけ鮭・鱒などの遡上する魚にとつて、自然林に接しており、床固めや護岸工事など人の手の入っていないこの地域は、重要な湧水地点としての役割を果たしています。工事予定地は、特に無数の湧水が一番多く常呂川に注いでおり、毎年産卵のために遡上してくる鮭を、多く見かける貴重な地域でもあります。

鮭が遡上する流域ではそうでない流域に比べて、樹木の年輪の幅も広く、植物の生育が良好で小動物が多いことが、カナダのトム・ライムヘン教授によって立証されたことはご承知のことと思います。この発見は、森と川と海がひとつになった生態系をなしていることを明らかにしました。森と漁業との関係では、河岸にある森林は魚の餌になるプランクトンを育て、魚の好きな日陰を作り、水を浄化するなどの働きをします。牡蛎や帆立の貝殻になる成分も森が与えてくれています。

前北大水産学部教授の松永勝彦氏は、「腐植土層における枯れ葉などが分解してできた腐食物質フルボ酸は、鉄イオンなどを結びつける働きがある。フルボ酸と結合した鉄は森林から河川へ運ばれ海の生物を豊かに育てる。」ことを実証しました。

落ち葉から染み出した栄養素が川から海に流され、豊かな海の恵みをもたらすことは、今や漁業関係者の常識になっています。

全国的な実践例として有名なのは、宮城県気仙沼の「牡蛎の森を募う会」。代表の畠山重篤さんは、一九八九年から気仙沼湾に注ぐ大川上流（岩手県室根村）の山地で続ける植林を「海は恋人」運動として、提唱しています。プナやカツラなど十haに落葉広葉樹三万本を植え終わり、目標は十万本。

肝要なのは、川の流域に住む人間の自然に対する意識づくりだそう。植林活動が小中学校の教科書で取り上げられたことも呼び水になって、地元内外で計六、〇〇〇人が体験学習をしました。「いくら漁民だけが木を植えても、流域に住む人間の気持ちが変わらなければ意味がない。結局我々は三つの場で木を植えている。まず山に、そして

人間の心、最終的には海藻という海の森に。だから三つの森を育てるという意味がある。」

しかし、実は気仙沼の畠山さんらの植林活動の二年前一九八七年から、オホーツク海沿岸の常呂漁協（帆立生産額日本一）では植林活動を行っていました。婦人部長の新高さんに直接お話を伺いました。「戦後一九五〇年代に、常呂川の淵には製紙工場、製糖工場などが進出してきて、工場の排水は川に垂れ流しの状態でした。常呂川の水は、赤く濁って秋には異臭を放つようになってしまいました。遡上する鮭・鱒もパルプくずや澱粉かすに呼吸を妨げられ、窒息して浜に打ち上げられるような状態でした。漁民たちはむしろ旗や大漁旗を立て、北見で集会デモ行進などを行い各行政機関に働きかけ、全国で二番目に常呂川の水質汚濁防止法が適用され、環境汚染基準が設定されました。安心したその後に、上流で森林伐採がおこり、湧水が半減してしまいました。常呂漁協では、自分たちの生活を守っていくためには、きれいな水を守っていくしかない！」と、常呂川流域約一〇〇haを買い取り、植林を始めたのです。」

現在、「森は海の恋人、川は仲人」という看板を立てて活動を続けています。林業は一〇〇年の大計といわれますが、一〇〇年前の豊かな海を取り戻そうと北海道漁協婦人部が中心となって、魚を殖やす植樹活動が進められています。

自然生態系と農業の関連でいうと、大雪山系の分水嶺から滋養を含む水と共に土砂を下流に運んで、北海道有数の肥沃な大地を作ったのが常呂川であることは疑う余地がありません。

二〇〇五年二月オホーツク地域自治研究所が、網走管内の有機農家とそれを目指す特別栽培農家

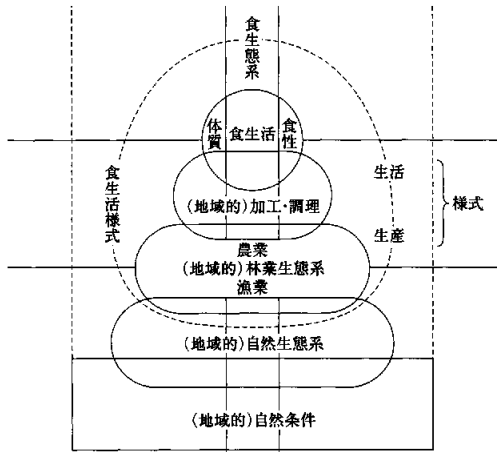


図2 食生活様式の構造（美土路達雄）

の調査をしました。有機農産物の認定を受けた農家だけを取り上げると、北見市内七軒中四軒が道路予定地の川東地区であることがあきらかになりました。拓殖短大教授故相馬曉氏の調査によると、四十四年前から有機農業をしている北海道で草分け的存在の、玉ねぎ農家・北原潤哉さんこの川東地区です。しかも常呂川を遡ると訓子府町には五軒、常呂川を下ると端野町には一軒の有機農家があります。

地域の農業・漁業は、地域の自然条件、地域の自然生態系の土台の上に、地域農業・漁業の生態系があるのではないかと考えられます。この考えの理論的裏付けともいえる文献を発見しました。農業経済・農民教育の北海道の父ともいわれる故美土路達雄氏の「食生活様式の構造」の考え方は、

基層には生存域・生活圏の地域的自然条件と自

然生態系をおき、その上の第二層として地域農業・漁業生態系を重ねて、それらと現実の食生活様式との重層的照応関係を見ることが出来ます。この分析で大切な点は、土台ともいえる地域自然条件、自然生態系を基層において、食生活様式が現実の食生活様式を貫いているという点であり、地域の自然条件、自然生態系を守ることが、地域農業・漁業を育て豊かな食の生態系を作ることにつながっているといえます。

森林、自然林を伐採して道路を作ることは、地域自然生態系破壊以外の何ものでもありません。地域の自然生態系が存立して初めて、地域農業漁業があり、守り育てられるのです。

今こそ、自然を守ろうとする市民と農民と漁民が共同する運動が必要とされるべきではないでしょうか。

北見パイパス工事計画の根本的誤りとその経過

自然林と自然河川（常呂川）が一体となった、豊かで多様な動植物の宝庫であるこの地域に、トンネル五本と橋梁八カ所を設けた一〇・三kmの高規格道路を建設しようとするのが、一般国道三九号北見パイパス（北見市・端野町）工事計画です。予算は約四〇〇億円（一mあたり約四〇〇万円）、国が八割負担の三二〇億円、北海道が二割負担の八十億円です。

北見市は、用地買収の業務を受託しています。この北見パイパス道路工事に対して、二〇〇三年十月に「北見の自然風土を考える」市民連絡会は、北見ヶ丘・南丘エリアの自然の豊かな地域ルート変更を求めて発足しました。

その契機となったのは、中の島公園、北見ヶ丘エリアの豊かな自然を大切にしようとして活動してきた「中の島ファン倶楽部」の呼びかけでした。それに応えて、二十四年にわたり北見の野草を観察し、記録している「草の会」のメンバー、民衆史掘り起こしの研究者、芸術家、オホーツク地域調査研究会のメンバー、鳥の鳴き声や木々の四季折々の変化を楽しみながら散歩している市民たちです。設立集会には四十名程度が集まり、参加者全員の見気持ちは「身近にある自然を残したい」との一点にまとまりました。

市民運動としては、一九八七年四月に知床伐採問題で結成された「いま知床を考える会」以来の、北見市では市民意識を持った、画期的な市民運動ではないかと思われまます。

主な活動経過

二〇〇三年 十月 緊急市民集会「北見バイパスを考える」

（五〇〇歳のミズナラと、周辺の生態系）講師・高畑滋氏（元）「止めよう日高横断道路全国連絡会」常任副委員長

「北見の自然風土を考える」市民連絡会を設立する。

二〇〇三年十一月

「巨木ミズナラ公開観察会」樹木医 中内武五朗氏を迎えて

二〇〇三年十一月

川東の里山で探案会。ミズナラ幹にプロタージュする。

二〇〇三年十二月

「第一回公開市民会議」北見ヶ丘・南丘、里山エリアの保全について

二〇〇四年 二月

「第二回公開市民会議」車座自由討論会

二〇〇四年 二月

「北見ヶ丘・南丘エリアの里山開発中止を求める署名」北見バイパス計画ルートの見直しを求める。五二〇〇筆を国土交通省道路局と北海道開発局に提出。

二〇〇四年 五月

「第三回公開市民会議」トンネルと自然環境への影響

報告・十勝自然保護協会 道路建設と事業評価・住民参加―講師・畠山武道氏（北大法学部大学院教授・北海道自然保護協会副会長）

スライド上映―北見の里山の四季と生きものたち―撮影解説・金田正美氏（「うらやまのエゾリス」作者）

二〇〇五年 一月

「第五回公開市民会議」身近な自然の価値と道路計画

二〇〇四年 七月

「講師・佐藤謙氏（北海道自然保護協会会長・北海学園大学教授）」

二〇〇四年 八月

「北見ヶ丘・南丘エリアの里山の開発中止を求める署名」北見バイパス計画ルートの見直しを求める、一〇五三五筆、国土交通省道路局と北海道開発局に提出。

二〇〇四年 九月

「第四回公開市民会議」北見バイパス工事計画の真相

二〇〇四年 九月

「講師・武田泉氏（北海道教育大学助教授）」

二〇〇四年 九月

「トネル建設による水環境の問題点―報告・十勝自然保護協会」

二〇〇四年十一月

「北海道自然保護協会による現地調査。」

「一般国道三九号北見バイパス中止を求める要望書を、北海道自然保護協会と「北見の自然風土を考える」市民連絡会が連名で、国土交通大臣、北海道開発局長、北見市長に提出。」

二〇〇四年十一月

「一般国道三九号北見バイパス（北見市・端野町）の予算凍結に関する要望書を、「北見の自然風土を考える」市民連絡会と北海道自然保護協会が連名で、谷垣財務大臣に提出。」

「講師・市川守弘氏（弁護士）」

「生物多様性条約と道路問題―講師・市川守弘氏（弁護士）」

士・環境法律家協会理事)

二〇〇五年 二月 大門実紀史・紙智子両参議員

現地視察

二〇〇五年 五月 「北見の自然風土を考える」市

民連絡会、市民参加の現地調

二〇〇五年 七月 第一回コウモリ調査の実施、

旭川大学教授 出羽寛氏他

二〇〇五年 九月 絵本作家あべ弘士デザインに

よるモモンガパズジ一〇〇〇

二〇〇五年 十月 一般国道三九号北見バイパス

(北見市・端野町)の予算凍結
に関する要望書を谷垣財務大
臣に提出。

開発建設部の北見バイパスの着工までの経緯と問
題点

一九九七年 事業化、環境調査、設計協議

一九九九年四～五月 環境影響評価準備書公告縦

覧

一九九九年 五月 住民説明会(北見市一回、端

野町一回)

八月 公聴会(北見市一回、北海道
主催)

二〇〇一年四～五月 環境影響評価書公告縦覧

五月 計画説明会(北見市二回、端

野町一回)

二〇〇二年十一月～二〇〇三年十月 事業説明会

(北見市九回、端野町二回)

二〇〇三年 十月 北見道路における環境保全対
策を考える懇談会設立(四回

開催)

二〇〇四年 六月 「オホーツクの道を考える会」

国土交通省に北見市長に早期
建設を求める約三八〇〇〇人

署名を添え要望

二〇〇四年 九月 「オホーツクの道を考える会」

早期着工の陳情書を北見市議
会に提出

二〇〇四年 十月 北見市議会、陳情書を採択

二〇〇四年 十月 工事着手

北見バイパス道路工事の問題点

① 住民説明会が多くの市民に知らされないまま
に開催されている。

② 「環境保全対策を考える懇談会」の構成メン
バーが、工事着工の賛成者のみに限られている。

③ 環境影響評価書がきわめて不十分である。

④ 北海道自然保護協会と市民連絡会共同の意見
書の内容には、一切答えずに強行着工した。

⑤ 住民のコンセンサスを得ないままに、推進派
の後ろ盾のみで着工した。

今後の運動の方向性

二〇〇五年五月より、七カ所の取り付け道路と
トンネル入口の工事が始まりました。二〇〇六年、
今年三月末～四月初めにはトンネルの本線工事に
予算が付き、五月の雪解けを待って着工予定です。
私たちの運動も緊急を要しています。今後の活
動として、

第一に北海道自然保護協会副会長・弁護士由市
川守弘氏を招き、第六回の公開市民会議を三月十
一日に行います。「北見バイパスは本当に必要か」
目的・必要性・効果の面から考えるをテーマ
に、四〇〇億円の税金の無駄遣いにメスを入れた

いと企画しました。多数の市民の参加で、この公
開市民会議をバネに四万人署名を達成したいと
思っています。(現在二五〇〇〇名の署名が、全
国・全道から集まっています。)

第二に、道路予算のうちの北海道負担分八十億
円について、北海道交渉を検討しています。高橋
知事に、道庁職員給料一〇%カットや職員削減よ
りも、無駄な公共投資を見直す方が効率が良いこ
とを理解してもらいたいものです。

第三に、自然生態系の保護は地域の漁業と農業
を育てるという視点から、漁民と農民と市民が共
同する運動を作って行きたいと考えています。よ
り一層の全道、全国の支援と協力を切に願ってい
ます。



(オジロワシ)